

幼児期の「いじめ問題」をどう考えるか その(1)

—— 幼児はどのようなときに、「いじめられた」と感じるか ——

遠藤良江 和田信行 井上千枝美 ○河邊貴子

(東京都立教育研究所 幼児教育研究部)

1. はじめに～問題の所在

東京都教育庁指導部の調査によれば、東京都における平成7年度のいじめ発生件数は、小学校において2225件、中学校において2127件であり、前年度の数値よりやや減少しているとはいえ、依然、深刻な状況を示している。各学校は真剣に解決の方策を求めた取り組みを行っており、いじめ問題の解決は現場の重要課題となっている。

東京都立教育研究所では、いじめ問題の解決のためには学校の内と外の問題を構造的にとらえる必要があると考え、先行研究やこれまでの事例からの研究成果を踏まえて、「いじめ」の構造を新しい視点から究明し、いじめ解決の方策を探り、学校、家庭、地域社会及び行政機関等への提言をした。(註1)

この研究の過程で「幼稚園にいじめはあるか」ということが問題となった。この研究の中では、いじめを「同一集団内で単独又は複数の成員が、人間関係の中で弱い立場に立たされた成員に対して、身体的暴力や危害を加えたり、心理的な苦痛や圧力を感じさせたりすること」と定義した。このような意図的な行為は幼児の場合、一般的には成立しにくいと考えられる。しかし、だからといって保育者がいじめの問題に関心であってよいわけではない。

問題は「幼稚園にいじめはあるかないか」の現象ではない。思春期にみられるいじめ解決の方策を求めるには、長期的、発達の視点からいじめ問題を考え、人格形成の基礎を培う幼児期に何を育てておかねばならないかを押さえておくことが必要だろう。

本発表では次の二つの方向から、幼児期のいじめ問題を考える。

その(1)……幼児に対して行った「いじめ」に対する聞き取り調査の結果を中心に、幼児の「いじめ」に対する認識と保育者の認識との違いを明らかにし、保育者の望ましいかかわりを考える。
その(2)……幼児が他者とかかわる場面で、保育者が「見過ごすことができない」と感じた事例を通して、保育者のかかわり方を考える。

2. 幼児の「いじめ」に対する認識

保育者の目には「いじめ」とうつらないことも、幼

児には「いじめ」と認識されている。私たちの調査でも、「自分の学級にいじめはあると思うか」という質問にほとんどの保育者は「ない」と答えているのに対し、当該園の全幼児の約60%が「いじめられたことがある」と回答しており、両者の「いじめ」に対する認識の違いが浮き彫りになった。保育者はまず、幼児がどのようなことを「いじめ」と感じるのかを知り、その上で幼児に対してどのような指導が必要なのか、保護者に対しては何を伝えなければならないのかを考える必要がある。

そこで、幼児のいじめに対する認識をとらえることを目的にし、次の4つの内容を得るように幼児への聞き取り調査を行った。聞き取りは、担任教師が自分の学級の幼児に対し、安定して遊んでいる場面で、聞き取りによって遊びに支障をきたさないと判断した場合に行った。(都内公立幼稚園5園、2年保育4歳児92名、2年保育5歳児149名)

- ・幼児は「友達にいじめられたことがある」と思っているのか。
- ・幼児はどのようなことをされた時に「いじめられた」と感じるのか。
- ・幼児は「友達をいじめたことがある」と思っているのか
- ・幼児はどのようなことをした時に「いじめた」と感じるのか。

(1)「友達にいじめられたことがあるか？」に対する回答をめぐって

4歳児、5歳児とも、約60%の幼児が「いじめられたことがある」と答えている。「どうしていじめられたの？」という質問では、4歳児の30%強は理由を無回答か「忘れた」と言っている。「どんなことをされたか」の質問についても「忘れた」の回答が多く、過去の事実認識が5歳児に比べてまだ十分にできていないことが分かる。回答の20%強は、「自分は何もしていないのにぶたれた」とか「急に押された」というもので、不意に、訳も分からずに起こる不快なことを「いじめ」と認識していることが分かる。また「自分が使いたかった玩具を友達が貸してくれなかった」とか「通ろうと思ったのに積み木があって通れなかった」

というように、自分の行為が阻止されたことを「いじめられた」と感じている。

年齢が低いと、相手に伝えたい思いや考えを言葉で十分に伝えることが困難なため、ぶったり蹴ったりする等の身体接触による表現方法を取り、それが相手に「いじめ」ととられてしまうこと、自分では「何もしていない」と思っているが、相手はそれを不快と感じていることに気付かない等、相手と自分の意識とのずれに気付いていないことなどが考えられる。

「どうしていじめられたの？」の質問に対し、5歳児になると約40%の幼児は過去の事実を挙げている。例えば、「自分がルールを知らずに間違えたので、友達にぶたれた」とか、「わざとじゃないけど手がぶつかったらぶちかえされた」等、「いじめられ」の理由を自分の行為に返したり、「一緒に遊びたかったが、何しに來たのと言われた」等、友達と心のつながりを求めているのに、それを否定するような言動に出会ったときのことを挙げた幼児もいる。また、「お母さんの悪口を言われた」とか、「怖く威張ったように言われた」というように言葉による心理的な不快感も「いじめ」ととらえた回答がみられたのも5歳児の特徴である。

このように年齢が低い場合、不意に生じる身体的不快感や自分のやりたいことが阻害される不快経験を指して「いじめられた」と感じていることが分かった。また、5歳児では心理的な不快感を挙げる幼児もおり、心のひだが複雑になっており、人とかかわりの中で様々な感情体験をしていることが分かる。同年齢の他者との初めての集団生活の中で、様々な葛藤やトラブルは、幼児の発達に必要な経験であるが、それが必要な経験として積み重ねられるためには幼児の気持ちを丁寧に受け止めたかかわりが必要である。例えば、「いじめられた」と感じている側には不快な気持ちを温かく受け止めるかかわりを、相手に不快感を与えていることに気付かない側に対しては相手の気持ちに気付かせる繰り返しかかわりが必要である。

(2)「友達をいじめたことがある？」に対する回答をめぐって

4歳児、5歳児ともに約半数の幼児が、「自分はいじめたことがある」と認識している。「うっかりぶってしまった」というように、わざとではないが相手に身体的苦痛を与えてしまったことをいじめたと捉えている回答や、「やられたのでやりかえした」という正当性を主張しながらも自分の行為をいじめと捉えてい

る回答もある。しかし、言葉による不快感を与えたと自覚している回答はなかった。身体的苦痛より、心理的な苦痛を相手に与えているという認識は、大人でもそうだが、幼児においても困難なことが伺える。

また、回答の中には、「何だかいじめたくなるときがある」とか「なんとなく」というように、見逃すことができない回答もみられる。自分とは「異質と思われる者」に対して、あるいは「弱い立場の者」に対して攻撃的な態度をとったり、排斥したりすることがあるとすれば大きな問題である。相手の感じている苦痛を知らせ、他者の気持ちを思いやることの大切さを知らせるのが、集団における教育の役割であろう。攻撃したり、排斥したりする行為そのものを否定したり禁止したりするだけでなく、そうせざるを得ない幼児の内面を理解しながらも、社会生活を送る上で人に対して、してはならないことがあることをしっかり押さえた指導が必要である。

(3)「誰かがいじめられているのを見たことがある？」に対する回答をめぐって

「誰かがいじめられているのを見たことがあるか」の質問に対して、「ある」と回答した159名にさらに聞き取りをしたところ、その多くはある特定の、比較的活動な行動をとる個人の名前を挙げていた。幼児は「力の強そうな」者が、訳もなく身体的な苦痛を与えている姿を「いじめ」ととらえやすいということが分かる。この結果は、「あの子はいつも乱暴をする」というように、ある特定の、行動を制御しきれないタイプの幼児に対する見方が固定的になりやすいことを示している。そのような幼児に対して、自己を調整する力を育てることと同時に、友達を思い込みで理解するのではなく、その子のよさも見つけていけるような学級集団を形成していくことが大切である。

3. 発達に必要な経験を積み重ねさせるために

幼児が「いじめられた」と感じる場面の多くは、保育者から見ると人とかかわりを学ぶ大切な機会である。「いじめの解決は幼児期の指導から」といって日常生活で起こる様々なトラブルを「いじめの芽」と捉え「摘む」という発想で指導を行ったとしたら、幼児の自己認識や相手への真の思いやりを育てることはできない。人との葛藤状態に対して弱くなっている現代の幼児及び保護者の実態を踏まえながら、生活の中で様々な感情体験を通して幼児に人とかかわる力を身に付けさせることを大切にしなければならない。